

# 日本語の雑談における「物語」の導入方法

## —日本語母語場面と日中接触場面の相違—

張 未 未

### 1. はじめに

「物語 (narrative<sup>(1)</sup>)」とは、「時間的に異なる2点、もしくはそれ以上の点から成り立っており、実際に起きた事件（過去の経験）をその事件の起きた時間的経過・順序に従って言語表現すること」（Labov 1972, 南 2005: 138 訳）である。日常生活に、過去の出来事や体験を時間順に再現する「物語」<sup>(2)</sup>はよく生じる。この自然に生じる物語は、前後の文脈と区別される<sup>(3)</sup>と同時に、連続性も保っているという（野村 2000: 48）。すなわち、自然談話の中に生じる物語は文脈に即してなされるのである。では、自然談話である雑談の中で物語は先行文脈からどのように生じるのだろうか。

日本語教育の現場では、物語自体の語り方の教育への取り組みは既になされており、日本語学習者の物語への指導に関する授業の実践報告（木田・小玉 2001, 中井 2004, 中井 2005, 相場・中井 2010 等）もある。しかし、物語る背景が提示されていないため、実際の談話場面において、物語をどのように導入するかについて、戸惑う学習者も少なくない。物語の先行文脈とのつながりも考慮に入れる必要があるのである。そこで、物語の導入方法を教える際には、語る前提となる先行文脈とともに学習者に提示すべきであると考えられる。そのためには、日本語母語話者による物語の導入方法を解明する必要がある。本稿は、雑談に現れる物語と先行文脈との関係について検討した結果を、日本語の会話教育に応用することを目的としている。

### 2. 先行研究

従来、日本語教育における物語の研究は、物語の構造と表現に焦点が当てられ、インタビューやストーリーテリングなどのタスクによって導き出されるものを主な対象として展開されてきた。

日本語の自然談話における物語に関する研究は、雑談の談話を扱った李（2000）と講義の談話を扱った高橋（2002）等がある。李（2000）は、会話分析の手法により、雑談の物語について、開始・持続・再開・終了する際の様相を捉えている。物語を開始する際の言語行動について、語り手の「1. 話を変える表示をする」「2. 話をするための許可を他の会話参加者に求める」「3. 話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする」「4. 他の会話参加者の興味を引く」という4種、及び、受け手の「1. 語り手に物語を要求する」「2. 語り手の物語を開始しようという意図を受け入れ、促す」の2種があるとしている（李 2000: 71-107）。本稿では、新たに雑談における物語と先行文脈との関

係に焦点を当てて、語り手が物語をどのように雑談に導入するのかについて、その背景となるものも視野に入れて分析する。高橋（2002）は、説明を基調とする講義に、時間的展開を持つ物語がどのように出現し、それがどのような働きをしているのかを解明するために、談話の伝達という点から、物語の用法を「1. 例示」「2. 提示」「3. 象徴」の3種に分類した。「1. 例示」は物語そのものを伝えることに重点が置かれており、「対象としての物語」というあり方である。一方、「2. 提示」と「3. 象徴」は何らかの概念を説明するための用法で、「手段としての物語」とされている。雑談における物語もそのような用法があると思われる。しかし、独話の講義と比べ、相互作用が頻繁にある、伝達目的が明確ではない雑談は、文脈の展開方法がより複雑なのではないかと考えられる。

日本語の文章論において、市川（1978）は「接続語句」を「文脈における思考方式を端的に示すもの」と定義して、それに基づく文と段落の論理的関係を示す8種<sup>(4)</sup>の「接続関係の基本的類型」を分類している。この文章の接続語句のみによる分類という限界を超えて、佐久間（1992, 2002, 2009）は「コミュニケーションの文脈展開の実態をよりダイナミックに把握する方法」（佐久間 2002: 176）として、文章・談話の「段」に適用する「文脈展開機能」を提唱し、3類14種の「話題統括機能」（佐久間 2009: 112）を定めた。本稿では、これらの文脈展開機能を把握する分析観点を踏まえて、雑談の談話における物語の機能を検討する。

### 3. 研究課題

本稿の目的は、雑談に物語がどのように生じるのかを解明し、その結果を日本語の会話教育に応用することにある。これまで、物語の導入方法については、日本語母語話者によるものを対象とする研究がほとんどであるが、応用に繋げるためには、母語話者のみならず、学習者の物語の導入方法の解明も必要である。そこで本稿では、母語話者と学習者の雑談における物語の導入方法を比較し、学習者の物語を導入する際に見られる課題も明らかにしたい。具体的には、日本語母語場面（以下、「母語場面」と称す）と日中接触場面（以下、「接触場面」と称す）を比較し、日本語母語話者（以下、「NS」と称す）と中国人日本語学習者（以下、「CNS」と称す）が物語をどのように雑談に導入するのかを考察する。そのために、次の3つの課題を設けた。

【課題1】母語場面の雑談において、NSが先行文脈からどのように物語を導くのか。

【課題2】課題1のNSと接触場面のNSとの物語の導き方の相違はどのようなものか。

【課題3】課題1のNSと接触場面のCNSとの物語の導き方の相違はどのようなものか。

### 4. 研究方法

#### 4.1 分析対象

本稿の分析対象は、同一のNSによる母語場面と接触場面の各約30分間の親しい友人同士の日本文語の雑談5組全10資料（計5時間19分28秒）である。調査協力者は、NS10名（NS1～NS10）、CNS5名（CNS1～CNS5）の全15名の20代女性である。NSの母語場面と接触場面における物語の

導入方法に相違があるかを確認するために、NS1～NS5には両場面に参加してもらっている。CNSは、全員日本滞在歴2～3年で、「日本語能力試験N1」取得の上級レベルの中国人日本語学習者である。

## 4.2 分析方法

本稿では、Labov (1972)<sup>(5)</sup>と李 (2000) の定義をもとに、「物語」を「連続する2つ以上の節からなる過去の出来事を再現する語り」として定義する。物語の前後、または、内部には「物語を開始・終了する合図」や「物語に対する評価」が入り込むことがよく見られる。本稿ではそれらについても出来事の部分とともに扱い、物語の「中心発話」<sup>(6)</sup>の統括する範囲を、「最小の話題が一对の『提題表現』と『叙述表現』からなる」（佐久間 2002: 167）話題をまとめる統括機能に基づく「話段」（佐久間 1987, 2003: 107）という概念を用いて、「物語の話段」と称す。また、「物語の話段」に先行する話題の中心発話の統括する範囲を「先行話段」とする。

分析の手順として、まず、メイナード (1993: 51-52) による物語の前置き表現の分類7種<sup>(7)</sup>を参考に、雑談の談話における「物語の話段」と「先行話段」を分けした。次に、物語と先行文脈の関係を分析するが、本稿では、市川 (1978) と佐久間 (2009) を踏まえ、雑談における物語の談話展開上の統括機能を【表1】に示す「1. 解説」「2. 例示」「3. 進展」「4. 強調」「5. 並行」「6. 反意」「7. 転換」の7種に分類して分析する。

「1. 解説」「2. 例示」は「物語の話段」が「先行話段」に統括され、「3. 進展」は「物語の話段」が「先行話段」を統括し、「4. 強調」「5. 並行」「6. 反意」「7. 転換」は「物語の話段」と「先行話段」が対等な位置にあることを示す。基本的には、「物語の話段」の最初の文頭の「接続表現」（佐久間 1992,

表1 雑談における物語の談話展開上の統括機能

機能	定 義	話題統括機能	接続関係	接続表現の例
1. 解説	先行文脈について理由を述べたり直接解説したりするために物語を語る。	b2. 話を深める機能	補足型／連鎖型	なぜなら／というのは／ちなみに／ただ
2. 例示	先行文脈をより詳述するために、具体例を物語の形で語る。	b2. 話を深める機能	同列型	例えば／特に
3. 進展	先行文脈を踏まえて、その帰結として物語を語る。	b3. 話を進める機能	順接型／逆接型	それで／で／でも／だけど／ところが
4. 強調	先行文脈の主旨を繰り返すために物語を語る。	b1. 話を重ねる機能	添加型	また
5. 並行	先行文脈と並行する内容を物語で提示する。	b1. 話を重ねる機能／b9. 話を変える機能	添加型／対比型	そして／で／次に／あと／一方で
6. 反意	先行文脈に反する内容を述べるために物語を語る。	b3. 話を進める機能／b9. 話を変える機能	転換型／対比型	でも／それに対して
7. 転換	先行文脈とは関係なしに、新たな話題として物語を語る。	a1. 話を始める機能／a2. 話を再び始める機能／b9. 話を変える機能	転換型	ところで

2002)を手掛かりに分析するが、接続表現が現れない場合、想定できる場合は補ってから分析するようにし、できない場合は提題・叙述・指示・反復・省略表現等の形態的指標によって分類した。接続表現が先行文脈と物語との関係を正しく反映できていない場合も、同じ作業を行った。さらに、「先行話段」の話し手の違いによって、「A. 自分の話に続けて物語る」「B. 相手の話に続けて物語る」の2種に分けて分類を精緻化した。

## 5. 分析結果

雑談全10資料には、母語場面79例（NS1～NS5：40例，NS6～NS10：39例），接触場面73例（NS1～NS5：34例，CNS1～CNS5：39例）の計152例の物語がある。接続表現が用いられないのは、母語場面では18例，接触場面では22例の計40例あり，物語全体の152例のうち26.31%になる。それ以外の物語に対する接続表現の使用率（使用率＝実際に用いられた接続表現数÷論理上接続表現が用いられる物語数）は、母語場面は61例中の28例で、45.90%となっており，接触場面の51例中の14例で、27.45%の約1.7倍あった。ただし、NSの「3. 進展」「5. 並行」ではない「で」と「3. 進展」「6. 反意」ではない「でも」が13例で、両場面におけるNSの接続表現の使用数の34例の38.24%もあった。「で」が「1. 解説」「7. 転換」に、「でも」が「1. 解説」「2. 例示」「4. 強調」「5. 並行」「7. 転換」に見られた。したがって、NSの雑談における接続表現の「遊びことば・場つなぎことば」的な用法（佐久間，1992）の多用が認められる。

### 5.1 母語場面におけるNS1～NS10の物語の導入方法

母語場面における物語と先行文脈との関係を，物語の談話展開上の統括機能によって分析し，その結果を「A. 自分の話に続けて物語る」と「B. 相手の話に続けて物語る」の別に集計した結果を，【図1】に示す。

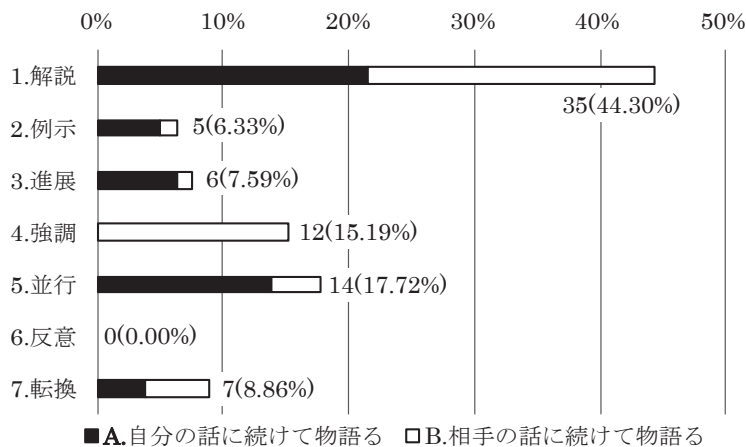


図1 母語場面における物語の統括機能の使用の分布

【図 1】に示したように、NS の用いる物語の統括機能は、「1. 解説」が 35 例の 44.30%、「5. 並行」が 14 例の 17.72%、「4. 強調」が 12 例の 15.19%で、この 3 種が全体の約 8 割を占める。また、「1. 解説」は「A」と「B」のいずれにも多く、「5. 並行」は「A」に多く、「4. 強調」は「B」のみに現れた。

NSによって最も多く用いられる物語の統括機能は「1. 解説」である。「1. 解説」は、先行文脈についての理由を述べたり、先行文脈について直接解説したりする機能であり、「物語の話段」が「先行話段」に統括されるパターンである。

【例 1】は、「解説」の「A」、すなわち先行する自分の話を解説するために、物語が開始される場合である。NS5 が発話 942NS5～944NS5 で、自動車学校の先生の性格について、『こだわりが強そう』と述べている。その後、発話 946NS5, 949NS5, 951NS5 で、なぜそう思ったかについて物語を用いて解説している。

【例 2】は「解説」の「B」、すなわち先行する相手の話を解説するために、物語が開始される場合である。発話 35NS8 の『今日は代休だ』という提示の後に、NS4 が 37 発話で「あ、残業した分を」と「代休」の意味を解説し始めたが、NS8 の 38 発話の「そう、そう」に遮られた。NS4 の説明に代わって、次の 39 発話から、NS8 はなぜ「代休」になったかを物語を用いて説明している。

【例 1】と【例 2】のように、NS は物語を用いて、積極的に先行文脈にある自分や相手の話を分かりやすく説明しようとしているのである。

2 番目に多い「5. 並行」は、先行文脈と並行する内容を提示する機能であり、「物語の話段」と「先行話段」の並行する段間の関係を表している。

【例 3】は、「並行」の「A」、すなわち先行する自分の話と並行する内容が、物語によって開始され

#### 【例 1】解説 A (NS)

942NS5：なんかこだわり強そうじゃない？

943NS5：私だけ？ そう思うの。

944NS5：めっちゃこだわり強そう。

945NS10：強いでしょ。

946NS5：曲がる時に、すごい言ってくるもん。

947NS10：まじで？

948NS5：うん。

949NS5：なんか、「いや、これもうちちょっと落とさなきゃ駄目だね」みたいな結構言われて。

950NS10：うん。

951NS5：次の時間、うわーって思いながら、やってたら、案外そのことについて注意されないみたいな。

952NS10：そう。

953NS10：それ、ほんと、それ。

42NS4 : {笑}。

508NS6：なんだっけ、東京ドームシティーに。

「5. 並行」の次に多い「4. 強調」は、先行文脈の主旨を強調する機能であり、「先行話段」の主旨



## 【例 4】強調 B（NS）

607NS6：家の家電、  
 608NS1： うん。  
 609NS6：なんかいろいろ変わってて、  
 610NS1： うん。  
 611NS6：結構電気とか LED になったの、何部屋か。  
 612NS6：そう、なんか、今まで、こう、紐で付けるタイプのやつだったのに、  
 613NS1：懐か // しいの？  
 614NS6： リモコンで、リモコンで付けるやつになってて、  
 615NS1： うん。  
 616NS6：しばらく、こういう、紐を引く癖が抜けなかった。  
 617NS1： はー。

-----

618NS1：久しぶりに実家帰ったら、  
 619NS6： うん。  
 620NS1：家電が変わってるって、めっちゃよく分かる。  
 621NS6： うん。  
 622NS1：テレビがめっちゃデカくなったり、  
 623NS6：{笑} あるね。

が「物語の話段」で繰り返される。この場合、「先行話段」も「物語の話段」になることが多い。

【例 4】は、「強調」の「B」、すなわち先行する相手の話の主旨を、物語を用いて繰り返す場合である。NS6 は発話 607NS6～616NS6 で『帰国したら、家の家電が変わっていて、とても慣れない』という物語を語っている。その直後、NS1 も発話 618NS1 から『実家に帰ったら、家電が変わっていて、とても困る』と、NS6 と似たような物語を語っている。この物語を語り合うことによって共感を示す談話スタイルは、Tannen (1984: 100-101) が「story round」<sup>(8)</sup>として取り上げている。

以上のことから、NS が物語によって、先行文脈を分かりやすく説明したり、段取りをつけて自分の話を先に進めたり、相手の物語を受けて共感を示したりすることが分かる。一方、物語を一つの新たな話題としていきなり提示することはあまり好まれないという傾向がある。

5.2 NS1～NS5<sup>(9)</sup>の母語場面と接触場面における物語の導入方法の相違

まず、物語をする際の接続表現の使用傾向について調査した。その結果、NS1～NS5 の接触場面における接続表現の使用率は 25 例中 6 例の 24.00% で、母語場面の 29 例中 13 例の 44.83% より少ない。これは、NS にとって接触場面のほうが母語場面よりもターンを取りやすいためではないかと考えられる。接触場面では、NS のほうが談話展開の主導権を握る傾向があるのである。

次に、NS1～NS5 と CNS1～CNS5 の物語の統括機能を調査した結果を【図 2】に示す。

【図 2】によると、NS1～NS5 が用いる物語の統括機能は、接触場面のほうが、「3. 進展」と

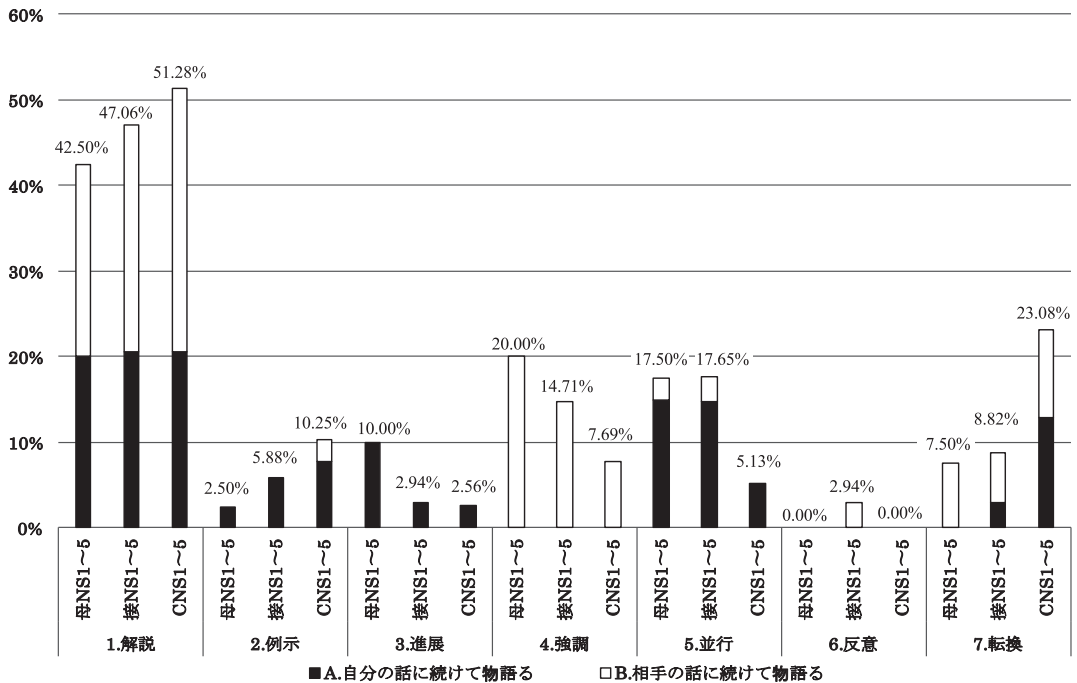


図2 NS1～NS5とCNS1～CNS5の物語の統括機能の使用の分布

「4. 強調」が母語場面より少ないのに対し、「1. 解説」と「2. 例示」がやや多い。つまり、接触場面では、NSが物語によって、話題を先へ進めたり、相手に共感を示したりすることが少なくなるが、先行文脈をCNSに分かりやすく説明したり、例を提示して詳細に描写したりすることが多くなる。非母語話者であるCNSが雑談の相手となった場合、理解してもらうために、提示した情報をより分かりやすく説明する場合がある。これは、CNSの日本語力の不足を補うために生じるのではないかと考えられる。

### 5.3 NS1～NS5とCNS1～CNS5の物語の導入方法の相違

母語場面のNS1～NS5と接触場面のCNS1～CNS5との物語の統括機能の使用を比較したところ、NSは「1. 解説」「4. 強調」「5. 並行」の順に多く、CNSは「1. 解説」「7. 転換」「2. 例示」の順に多いという相違が認められた。また、CNSによる「7. 転換」はNSの7.5%の約3倍の23.08%なのに対し、「3. 進展」「4. 強調」「5. 並行」はそれぞれNSの半分にも満たない。

【図2】に示したように、NSもCNSも「1. 解説」を最も多く用いている。「B. 相手の話に続けて物語る」の場合、CNSのほうがNSよりやや多い。市川（1978: 92-93）の「8. 連鎖型」の7種の下位分類<sup>(10)</sup>に従って、「1. 解説」の内訳を分析した。その結果、CNSは「B」の「VI. 応対（問答形式）」が12例中8例の66.67%で、NSの9例中3例の33.33%の2倍近くある。



【例5】解説B (CNS)

287NS1：なんか、終わらないよって苦しい夢？

288CNS1：うん。

289CNS1：あー，ゼミで発言して，

290NS1 : うん。

291CNS1:「あー、なんか、やっちゃった」っていう感じ。

292NS1 : [笑]。

293CNS1：なんか言っちゃいけない意見を言っちゃったとか [笑]。

294NS1 : そうなんだ。

【例 6】轉換 A (CNS)

376NS3：まさか、年上だと思わなかった。

377CNS3 : そう。

378CNS3：びっくりしたよ。

379CNS3：みんな年上なんだ。

380NS3 : {笑}。

381CNS3：言っちゃっていいの？

382NS3：何？

383CNS3：超ビッグニュースだよ。

(9 発話省略)

392CNS3：この間はさ、Cさんから、

393NS3 : うん。

394CNS3：なんか、Lさんが、本当に、

395NS3 : うん。

【例5】はCNSによる「1. 解説」の「B」, すなわち先行する相手の話を解説するために、物語が開始される場合である。CNS1は発話287NS1で「終わらないよって苦しむ夢?」と、夢の詳細を聞かれている。発話289CNS1からCNS1がその夢の物語を詳しく語っている。

【例5】のように、CNSがNSの話を解説するために物語をするのは、NSの具体的な内容を掘り下げる質問によって、CNSが物語を遠慮がちに語ることによるものだと考えられる。

CNSが2番目に多く用いる統括機能は「7. 転換」である。【図2】に示したように、NSとCNSとの「7. 転換」の使用の差が「A. 自分の話に続けて物語る」に顕著に現れている。

【例6】は、CNSによる「7. 転換」の「A」, すなわち先行する自分の話とは関係なしに、新たな話題として物語をする場合である。CNS3は、発話378CNS3と379CNS3で後輩がみんな年上だという

## 【例 7】進展 A (NS)

548NS8：そもそもね、私がフェイスブックをね、3 億年に 1 回みたいなペースでしか開かないから、

(6 発話省略)

554NS4：悲しい。

555NS4：仲間はずれ。

556NS8：そう。

557NS8：ねー、本当に可哀想。

558NS8：で、それ {笑}、

559NS4：{笑}。

560NS8：そう、それで、

561NS4：うん。

562NS8：なんか、すごい久しぶりに、何も考えないで、11 月中旬になった時に、で、フェイスブックパカーって開いたら、えーと、OBOG 会の幹事の人から、フェイスブックのメッセージが来てて、

563NS4：はい。

564NS8：「OBOG 会の案内をいたしますので、こちらのグループにご参加ください」って来てたの。

565NS8：あー、そうなんだってピーって開いたら、その日開催みたいな。

ことに驚いている。その後、発話 381CNS3 で、突然「言っちゃっていいの?」と、話題を L の噂話へと切り換えている。

CNS が自分の話に続けて物語る場合、「7. 転換」の「A」の物語の統括機能を多用するのは、【例 6】のように、CNS が先行文脈とは異なる内容の物語を新たな話題として提示することが多いことによるものである。これは、CNS の雑談の話題が深まらないという傾向に繋がる恐れがある。

一方、CNS による「3. 進展」の「A」、「4. 強化」の「B」、「5. 並行」の「A」が NS に比べて少なかった。

【例 7】は、NS による「3. 進展」の「A」、すなわち先行する自分の話を踏まえて、その帰結として物語をする場合である。NS8 は、発話 548NS8 で、『フェイスブックをあまり開かない』と述べている。発話 558NS8 から、『だからフェイスブックで来るメッセージにすぐ気が付かなかった』という物語を語っている。

【例 3】(「5. 並行」の「A」)、【例 4】(「4. 強調」の「B」)、【例 7】(「3. 進展」の「A」) に示す、段取りを付けて自分の話を先に進めたり、相手と共通の物語を出し合ったりするという NS の談話スタイルは、CNS にはあまりなかった。これは、CNS の日本語能力不足に起因することが考えられる。母語ではないゆえに、使用できる表現が限られているため、次に話題をどのように展開したらいいか

分からないのである。また、母語である中国語の談話スタイル<sup>(11)</sup>からの影響も考えられる。そこで、日本語の会話教育においては、具体例を用いて、上記3種の雑談における物語の導入方法をCNSに提示する必要がある。

## 6. おわりに

本稿では、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の雑談における物語の導入方法を物語の談話展開上の統括機能という観点から分析した。母語話者は、物語を用いて段取りを付けて自分の話を先に進めたり、相手と共通の物語を出し合って共感を示したりする。一方、学習者は相手の母語話者の質問に応じるために物語をし、また、先行文脈とは異なる話題として物語を提示する。このように、母語話者は先行文脈を活用した形で物語をするのに対して、学習者は唐突に、消極的に物語を語る。これは、学習者の日本語能力の不足、また、日中談話スタイルの相違からの影響だと考えられる。そこで、日本語の会話教育では、学習者に対して、どのようなタイミングで物語を導入するのか、物語を用いてどのように話題を展開するのか等、先行文脈を踏まえた物語の導入方法を提示する必要がある。

今後は、物語の統括機能と形態的指標との関係を考慮し、研究を深める必要がある。また、物語と後続文脈との関係についても今後の課題とする。

## 謝辞

本稿は、2018年8月のJSLs言語学会での発表を大幅に加筆修正したものです。本学大学院教育学研究科の松木正恵教授と日本語教育研究科の佐久間まゆみ名誉教授をはじめ、学会発表時にご指導・ご助言を賜った諸先生方および調査協力者に心より感謝申し上げます。

注(1) Labov (1972: 359-360) は、“narrative”を、“one method of recapitulating past experience by matching a verbal sequence of clauses to the sequence of events which (it is inferred) actually occurred”と定義している。

(2) 李 (2000: 8) は、「物語」を「過去に発生した出来事を雑談の中で報告すること」と定義している。メイナード (1993) は、それを「会話物語」と呼んでいる。

(3) 物語の経験性と時間軸という属性が、物語と前後の文脈と区別する条件である。(野村 2000: 37)

(4) 「1. 順接型」「2. 逆接型」「3. 添加型」「4. 対比型」「5. 転換型」「6. 同列型」「7. 補足型」「8. 連鎖型」

(5) Labov (1972: 360) は、“a minimal narrative”を“a sequence of two clauses which are temporally ordered”と定義している。

(6) 『中心発話』とは、1話段内部の複数の発話連鎖を一つの話題のまとまりとして統括する機能を有する発話である。提題表現と叙述表現が複数の発話間にわたる場合や、倒置や省略される場合も少なくない。(佐久間 2002: 107)

(7) (1). ジャンル移動の発表 (2). 物語の価値を主張する (3). 物語の源はどこに、又は誰になるかを述べる (4). 聞き手にどんな関係があるかを述べる (5). その物語を相手がまだ知らないことを確かめ、物語を披露してもいいか許可を取る (6). 物語のタイトルとも言えるようなテーマの発表をする (7). 聞き手から出されたテーマを受け入れた形の物語であることを伝える

- (8) Tannen (1984: 100) は, “story round” を “a particular kind of story cluster, in which speakers exchange stories of personal experiences that illustrate similar points” と定義している。
- (9) サンプル数のバランスを調整するために, NS1~NS5 にしている (次節 5.3 も同様)。
- (10) I. 解説付加 II. 見解付加 III. 前置きの表現との連係 IV. 場面構成 V. 引用関係 VI. 応対 (問答形式) VII. 提示的表現との連鎖
- (11) 楊 (2005) は, 中国語母語話者は, 話題の終了の合図をそれほど示さなくても, 次の話題を導入することに抵抗感がないと述べている。

## 参考文献

- 相場いぶき・中井陽子 (2010) 「会話授業におけるストーリーテリングの分析—聞き手を引き込むために話し手が用いる言語的・非言語的・音声的要素—」『日本語教育方法研究会誌』17 (1) pp. 70-71, 日本語教育方法研究会
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 木田真里・小玉安恵 (2001) 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場での経験談の談話指導に向けて—」『日本語国際センター紀要』11 pp. 31-49, 国際交流基金日本語国際センター
- 佐久間まゆみ (1987) 「文段認定の一基準 (I) —提題表現の統括—」『文藝言語研究言語編』11 pp. 89-135, 筑波大学大学院人文社会科学研究科
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要文学部』41 pp. 9-22, 日本女子大学
- 佐久間まゆみ (2002) 「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史他 (編) 『日本語の文法 4 複文と談話』pp. 119-189, 岩波書店
- 佐久間まゆみ (2003) 「第 5 章 文章・談話における『段』の統括機能」佐久間まゆみ (編)・北原保雄 (監修) 『朝倉日本語講座 7 文章・談話』pp. 91-119, 朝倉書店
- 佐久間まゆみ (2009) 「第 2 章第 3 節 表現の展開・構造」糸井通浩・半沢幹一 (編) 『日本語表現学を学ぶ人のために』pp. 101-116, 世界思想社
- 高橋淑郎 (2002) 「講義における『物語』に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』5 pp. 51-76, 一橋大学
- 中井陽子 (2004) 「会話分析の視点を生かした会話授業—ストーリーテリングのテクニック指導の実践報告—」『日本語教育方法研究会誌』11 (2) pp. 4-5, 日本語教育方法研究会
- 中井陽子 (2005) 「談話分析の視点を生かした会話授業—ストーリーテリングの技能指導の実践報告—」『日本語教育』126 pp. 94-103, 日本語教育学会
- 野村真木夫 (2000) 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 南雅彦 (2005) 「日本語学習者のナラティブ」『言語学と日本語教育』IV pp. 137-150, くろしお出版
- メイナード・泉子・K (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 楊虹 (2005) 「日中接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』30 pp. 31-40, お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究—会話管理の観点から—』くろしお出版
- Labov, William. 1972. The transformation of experience in narrative syntax. In *Language in the inner city*. Chapter 9. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 354-396
- Tannen, Deborah. 1984. *Analyzing talk among friends*. Norwood, NJ: Ablex